

禪と現代

玉城康四郎

禪研究所主催の講演に招かれまして、私、初めて当愛知学院大学にまいります機会を得、大変うれしく思っている次第であります。いろいろお話には聞いておりましたけれども、この愛知学院大学が盛んな勢いで発展している様子をまのあたりに拝見いたしましたびっくりしている次第でございます。

本日は、大学における講義の延長という気持で、話しをしてもらいたいということで、ここにまいりましたのですけれども大変大きな講堂で、いろいろな先生方もおみえになっている様子で、かえって恐縮している次第でございます。題目といたしまして「禪と現代」という大きな課題を掲げましたが、これは非常に難しい問題を含んでいると思うのでございます。この「禪と現代」ということについて、ただちに私の心に思いうかんでまいりますことは、禪と現代とが非常に歩みよっている。まさに、禪と現代とが火花を散らして接触しあっているという一面と、他方におきましては、この二つはぜんぜん掛け離れた存在状況を呈している。縁もゆかりもない二つの在り方であるという、そういった相反した両面を感ず

禪と現代(玉城)

るのでございます。

その第一の方は、ごぞんじのように、今日、禪が日本だけではなしに、かえってヨーロッパ、米国におきまして、大変な勢いで浸透しつつあるという状況でございます。これは、鈴木大拙師の努力にまつところが大きいと思うのですが、また一方では、ヨーロッパ、米国に禪の生き方を吸収しなければならぬというような、一種の社会的必然性と申しましようか、そういうものが起因となりまして、ヨーロッパ人、米国人の一部に、非常に熱心に禪を通じて、仏教が研究されているということがいえると思います。

二

先日、私はバリで活躍しております弟子丸泰仙師にお目にかかりまして、いろいろ向こうの禪の状況をうかがったのですが、その話しによりますと、弟子丸師の門下に馳せ参じておりますのがヨーロッパに十二万人を数えるということですが、十二万というのは膨大な数ですし、それはどのように数えたのか、私は存じませんが、バリの郊外にあります森の中で、その会を催しますと、多くのパリッ子が、中には俳優、作家とか、あるいはサルトルの弟子とか、そういった人々が馳せ参じて、一心に坐禅をやっているというのであります。

弟子丸師についてまいりました二、三人のフランス人に聞いてみますと、やっぱり、西洋の従来の生き方、考え方にきたらないで、何か禅の中に求められるのではないかという気持が非常に強いと感じたのであります。ヨーロッパ人の中には、自分と自分の相手、あるいは、人とそれに対する物という考えで認識をしておいた。いわば、主観と客観との関係において、我々の知識が成立していた、そういう地盤のもとに考えを進めていた。それが唯一の考え方と申していたのが、だんだん禅を学んでみると、それとまったく違う、自分も相手もない、あるいは、心と体、精神と物質という、そういう相対関係を離れた、いわば世界が一つと考えられていくような理解の仕方の中にあるということを見つけて、非常

にショックだったと、そのフランス人が私に語ってくれたのであります。

多かれ少なかれ、禅に入る事情は違いますが、やはり西洋の従来の方と異って、世界を一つにながめていく自分と相手と一つにとけ合ったものとして考えていくという、そういう道が仏教、あるいは禅にあるということが、彼らにとっては驚きであったようです。こういうことがかれらの問題意識となっておりまして、したがって、禅に対する態度が熱烈であり、真剣であるということができると思います。

私のごく親しい禅の老師から、いつも聞かされるのですが、日本よりも、これからは西洋に禅は移っていくのではないかと、と常々語られているのですが、その中でも強い印象として残っているのは、ユダヤ人が禅の実践に対して熱心である。熱心であるばかりでなく、禅の本質に直接せまって、非常にするどく切り込んでくると、これにはほとほと自分の方が顔負けするほど熱烈であると申されるのですが、おそらく、ユダヤ民族、これは大変優秀な民族であるばかりでなく、歴史的に大変な問題をかかえている。如何にして、人生を生きぬくべきかという困難な宿命を抱えているわけでありまして、そういう問題意識から、この人達は仏教の本質に対して真摯な態度をもっているのであるといえると思えます。これは、数からいえば、ごく少数の人々であるかもしれませんが、言葉を超え、理屈を超えた宗教の息吹きというもの、西洋の国土に種をおろしまして、中国人や日本人が持ちこたえてきた、そういった形態とまったく違った、宗教の新しい生命、形態というものが、西洋の土壌に芽生えてくるのではないかと、そういう予感を覚えるのであります。それから、いま一つの面といたしまして、この「禅と現代」というものが非常に掛け離れた要素を呈しているのでございます。御承知のように、経済が繁栄いたしましたして、いろいろの方面で人間の幸福というものが行き詰まって、将来どうなるかという不安を持たされているのが我々の現状でございます。そういうことが、また、ゆっくり将来のことも考えるいとまもなく、我々の生活は多忙な雑事においまくられ、とにもかくにも生きていかなければならないというような、いわば我武者らな生き方が今日の現代人の実情であります。

そういう現代人の心の中に入ってみますと、外面は如何にも波瀾もない、ごく順調のようにみうけますが、内側に入っ

てみますと、考え方が表面的というか、上面のみを考え、だんだん物質的な考え方となっている。そして、時とすると、ちよつとしたつまづきから、自分の進路をあやまってしまうという事件が、ひんぱんに起っているわけでございます。よく聞く話であります。一流の大学を卒業し、一流の会社に就職して、会社の中でも皆んなの信望を受け、エリート、コースを進んでいる三十代の課長、あるいは課長補佐といった働き盛りの青年が、一見、順風に帆をあげて、大変順調な人生のコースを歩いている、一般からもうらやましがられている、そういった人物が、突如として自殺をする、あるいは蒸発して行方をくらますなどよくきくのであります。私はその方面の調査をしている心理学者から、時々聞かされるのですが、一度現代人の心の内側に入ってみると、何か索莫とした気持で物の表面だけに移行行くといった、そういう傾向が次第に強まっているのでございます。

そういう点から考えてみますと、禪のきわめて内面的な深まりということ、現代の世相とがちょうど相反するような方向へ向いているようにみうけられるのです。このように禪と現代とが一見相反するように思われるなかで、禪の世界にわれわれの生きるべき確かなもの、あるいはその目あてというものがあるとすれば、我々は、禪というものに落ちついて充分検討してみる必要があると思ひます。

三

現代の特徴として、いろいろその性格があげられると思ひますが、その特徴の一つに現代は未来化しているといひますが、未来になりつつあると、一見奇妙な発言のようですが、そういうことを強く感ずるのでございます。現代から未来に向うということは当然のことでございますが、かつては未来を予言する特殊の才能に恵まれた人々があつたわけであり、す。いわゆる予言者として人類の未来を予言するという任務をもつた人々が現われていたのですが、現代は、そういう現われかたではなくして、実は現代という時代が予言者ではないかという気がします。もっと別な点から申しますと、我々

一人一人が未来に入り込みつつあるという、そういう何か不安定な、足もとをゆさぶられるような、そういう時代の中で生きていくように感じるのでございます。

私は数年前、未来学という問題に関心をもちまして、この未来学ということが我国のみならず、世界各国におきまして大きな問題となっていたのでございます。つまり、現代は大変な不安をもちながらも、何か人類の未来に対しては異常な関心、あるいは好奇心を持っていた。二十年、三十年、あるいは五十年先は、この人間世界は一体どうなるのだろうか、あるいは自然科学の方から、あるいは宗教学、心理学、政治学の方からといった、いろんな側面から、何十年先かの未来を予測した書物が本屋に氾濫していたのであります。

私はまったくの素人でありませんが、自分達の将来のことでもありますので、かなり読んでみたのであります。今日、本屋をしらべてみましても未来学に関する本がほとんどみあたらないのでございます。私はどういう考え方を今日もっているのでしょうかと、いろいろしらべてみましたが、ほとんど今日の出版物にそれを発見することができなかったわけがあります。これは、よくわかりませんがこれまで好奇心をもっていた未来に対して、どうにもならない末恐しい人間の予感と申しますか好奇心だけでは整理のつかない、何か不気味な人間の将来という予感に変わってきているのではないかと思うのです。この現代という、こうした性格の中で我々はもう一度私どものいわば故郷の宗教であります仏教にたちかえり、あるいは実践的に純化された禅というものにたちかえり、禅の本質、生命といったものに思いをいたして、なんとかして現代の問題にかかわりをつけてみなくてはならないと思うのであります。

今日、経済社会というものが急激な変化をみせているのであります。第一次産業から第二次産業、そして第三次産業へと転換しつつあるのでございますが、第一次産業から第二次産業へ、いわゆる、前工業社会から現代への経済社会の変化というものが、今日では、その工業社会から脱工業社会へ、換言すれば、加工技術の産業形態社会から、知識産業、情報産業の社会構造へ移行してきたということがよくいわれているのであります。数年前の書物によりますと、米国の一人あたり、GNPが三千ドルに達しますと完全に脱工業社会に入っていく、我国の場合はその半分、GNPが千五百ドルにな

りますと、脱工業社会に入っていくということが数年前にいわれたのでございますが、その目標額に達するのが昭和四十年の終り頃には達するであろうといわれていたのであります。

ところが、私は工業社会が完全に脱却した社会がどういう社会になるのか予測がつきませんが、ともかく、社会生活の転換にもとづいて、従来のいわば、労働階級といわれていた階級が漸次変化して、大衆社会の開發が急速な勢いで促進されております。これは隣りの中国大陸において歴史的転換を上げていることは、我々の目撃している所でありまして、ここにはいろいろな問題を含まれていると思うのですが、従来未開發であった大衆社会がどんどん開發されていくということが、世界的な一つの特徴になっていることは確かであります。こういう社会状況の中で私達のもっている価値観もとうぜん変化してくるということも明らかであります。戦争中の価値観から敗戦後の急激な価値観の変化、さらに三十年たった今日の価値観の変化というものは非常に激しいものがあると思うのです。つまり物質的な欠乏、それにたえてやっまいりました戦後の我々の生活。物質的な欲望が充足してまいりますと、そこからなにか精神的なものへの傾向、それを求めるという気持がわいてくるのであります。単に豊かに満足した生活だけでは我々の生きる欲望、生きる力、生きる生命というものが、そこに新しいものを求めて動いてくるのは当然と思えます。

こういう条件のもとで、我々は、この禪の中に一つの現代への特徴と共通のものを見出し得ると思えます。というのは私どもは戦前の教育を受けて、戦後に大きな社会の時代転換を向え、生きる基準というものが一度にくつがえされて今日に至っているわけで、従来の社会生活の習慣、しきたりとかが戦争を契機としてまったくくづされてまいりました。

今日、青年諸君の中から、従来のしきたりに執られない自由奔放な行動、欲望が大変強くなっているわけでありまして、我々年配から見ると、時折、ひんしゆくするような印象を受けることが多々あるのですが、人間社会の建設的な方面より考えてみますと、従来のしきたりに執られない自由な発想、考え方というものが、青年諸君の間におこっていることは、私ども年輩のものからみれば大きな現代の特徴と思えます。

仏教の根本には、般若の教えが基礎になっているのであり、これは釈尊から印度仏教、中国仏教と大きく転換してきた

仏教の一番の根底になる生き方となっていると思います。その般若、即ちいかにして生きるべきかという、この根源的な知慧というものが純化されて、いわゆる禅という実践にまでなりたってきたわけですが、この般若、即ち禅の実践というものは、全ての生き方からくりをふりすて、ただ無条件に白紙になって生きようとするこの訓練であると思います。

青年諸君からいえば、人間の原点にかえて、そこから如何にして生きるかということ、まったく白紙にかえて、人間の生き方を問いなおすということが般若の精神あるいは禅の本質にあると思うのであります。私は、原点という「点」ではなくて、むしろ人間の原態、もとの原初の状態、それは常にゆれ動いている。それは凝固した一つの点ではなくて、たえず、いのちに満ちあふれ、ゆれ動いている。その人間の原態（原初態）、そこにまでたちかえることが禅の本質にあると思うのであります。この原態にたちかえるということが、単に我々が机の上で理解するとか頭で分別するとかということではなくして、実際に体で行じていくということが基本条件であると思います。

このことは、先程申しましたヨーロッパ、米国の人々が、ごく一部ではありますが、従来の彼らの考え方に行き詰り禅に入ってくるという、その生き方にはけっして頭で理解する、心で分別する、あるいはまた、今日青年諸君の間でよくわれているフィーリングで納得する、ということだけでなく、フィーリングも分別も哲学的な認識も、あるいは意志も、そういった人間のすべての精神領域というものを総括して、さらに、それだけでなく、もっと深い無意識、今日、精神分析や深層心理学で急速にその研究が発展しつつあります。精神分析でいわれております無意識の世界にまで深まっています。しかし、無意識というのも一種の意識の領域でございまして、むしろ、仏教や禅が強調したいのは意識、無意識、精神をさらに包括している身体、これが私どもの具体的な全体であります。このように自分の一切を包括した体全体で納得していくという、この納得にまで到着しなければ、仏教の般若、禅の本質にせまってしまうことにはできないと思っております。

さきほどの原態にかえる、あるいは諸君のいう原点にかえるということは、単に分別や理屈、あるいはフィーリングで

禪 と 現 代 (玉城)

かえるということではなくて、我々の体全体でかえっていく、その訓練を重ねていくということが、禪の実践の眼目であると思うのであります。これは、かならずしも、仏教あるいは、禪だけの主張ではないのであります。私はかつてニーチェの「ツアラトウストラはかく語りき」を続んだことがあります。ニーチェはその中で精神よりも身体に注目して、身体の礼讃をやっているのですが、その近代から現代にかけての天才の魂に、それと似た着想が起っているのを感じます。あるいは、だいたい前に亡くなりました、有名なフランスの評論家でありますバレリーは「テスト氏の一夜」の中で、私は二・三十年ばかり前に読んだことがあります。そのバレリーが懸命になって骨身をけづって人間の木質にせまっていく、そのプロセスを見ていますと、私はちょうど仏教の紀元三、四世紀に印度に展開してきました、あの無着、世親の唯識説をよんでいるような気がいたしました。愕然としたことを思い出します。むしろバレリーは無着の阿頼耶識というような言葉に類したものは使っておりませんが、唯識の阿頼耶識に似たような人間の身心、精神だけでなく、精神をささえている人間の根源にせまっているのを読みまして大変感激したのであります。それは、我々がほんとうに白紙にかえて、人間の原態にかえていくという努力をするならば、けっして禪の独占物ではなくして、当然人間等しくそうした問題に逢着してくると思います。まさに、そうした人間にとって普遍的な世界、普遍的な実践を主張しようとしているのが禪の本質であると思います。

さて、もう一つ問題になりますのは、人間のどうにもならない現状、今日の言葉で申しますと、どうにも救いようのない人間の実存、仏教の言葉で申しますと阿頼耶識、人間の深い我執と申しますか、そういう一面を我々現代人は充分検討していくことが必要であると思います。これは、仏教の開祖である釈尊は無明という言葉によって人間実存の暗い暗黒の世界を突き付けたのであります。私は大変口はばつたいことを申すようで恐縮ですが、この釈尊の突き付けた人間実存の底のしれない闇というものについて、これまでの仏教史というものは、これに直面して、まともにこれを受けとって、これを解決しようとする努力がた然なかつた気がいたします。その一番大きな問題は、従来の仏教の形態が基本的に出家形態であつたからと思うのです。そうした形態から私どもが今、勉強している仏教思想、あるいは実践とい

うものもあらわれているのであります。しかしながら、もはや今日におきましては、この出家と在家との区別はうしなわれつつあるのであります。あるいは失なわれてしまったともいえるのでありまして、先程からいいますように、これからの仏教は大衆に根ざす形態に発足していかなければならない。そういうふうに思うのでございます。

この出家形態になりますと、とかく人間の生きる苦しみというものが忘れがちになるのでございます。今日、在家、出家の区別のなくなった、つまり人間自身の宗教として仏教をになっていくかぎり、釈尊の突き付けました無明ということ実存の底しれない闇ということ、それを深く見詰め、この問題から目を離さないで突き詰めていくことが大変大事だと思います。

第三に私は自然への復帰ということを考えてみたいと思います。今日、自然ということが大変重要な課題となっていることは申すまでもありません。日本の自然が公害のために浸蝕されて、大きな社会問題となっていることは私どもの目撃しているところでございます。しかし、今日一般的な考え方をみますと、どうも自然にかえれという主張が私には人間中心主義になっているのではないかと思えます。動物もこんなにやられ、植物もこんなに痛めつけられているので、やがて人間もやられるというように、したがって自然をもっと大切にせよというような主張には、やはり人間中心というところが、その根底に横たわっているように思われるのであります。

実証的な哲学の草わけであります、英国のフランシス・ベーコンが「四つの偶像」という見解をかかげまして彼はいみじくも人間中心の考え方にするどいメスを突き付けているのでございます。私はベーコンの「四つの偶像」の見解の中でもっともショックな、かれの洞察は、われわれはこの人間という偶像にとりつかれているという、そういうことを見定めていることでもあります。これは実に大きな問題でありまして、人間中心主義から離れて、大自然大宇宙の立場にたつことは我々人類にとっても非常にむづかしい問題を含んでいるのであります。私はなんとしても人間中心という考え方に批判の眼を向けて、もう少し高次の立場にたつていかななくては、やはり人類の存続もあやふいのではないかと思うのであります。

こうした観点から興味深いことは、最近中国の医学、中国の科学というものが漸次スポット・ライトをあびているのでございます。西洋の科学的な考えというものが、今日に至るまで唯一の科学的な道であるというのが一般の考え方でございますが、これに対して中国の世界観の中に一種の科学的な自然観というものが発展しているのでございます。西洋の認識の立場では、対象を目の前に押し出し、突き離って観察するのが一般の特徴であります。中国の場合には、天地全体を一つのつながった世界として、その関係の中で自然も見、また我々の身体を考察していくという、そういう見地から中国の科学、医学というものが発展しているのでございます。もちろん、こういう中にはきわめて機械的な操作が含まれていて、そこには多大の疑問を残しているのですが、しかしながら、今日いわれていきますように、経絡、あるいは鍼灸といった西洋の医学とは、まったく違った路線の中で人間の身体の治療において実効的な証拠をあげているのでございます。

こういうことを考えてみますと、ものの考え方の根源におきまして、人間と自然、あるいは精神と身体、そういうものを別々にみるのではなく、天地自然を一つのつながりとして考えていくという根拠にたつて、東洋の科学というものが展開しているのです。ここに、科学の名において実証的なものが既にあらわれているというのを考えますと、現代社会において、この科学的ということについても、あらためて問い直す必要があると思うのでございます。そういう点から、中国の仏教、あるいは天台とか華嚴、あるいは実践的な禪とか念仏というものをとりあげてみますと、この中国独自の思想には具体的な自然観、世界観というものが発展しているにもかかわらず、中国における独自の仏教、たとえば天台、華嚴といった学問仏教において、その世界観はまだ観念的にとどまっているのであります。私はこれからの問題として仏教からもそうした自然観、あるいは具体的な実証的な科学領域までも展開させていく必要があると思うのであります。

私は最後に、「禪と現代」という課題に対しまして、道元禪師の世界にふれてみたいと思います。道元禪師の「正法眼蔵」は日本人としてはたぐいまれな深い思索と深い禪の体験に基づいて著された書物であり、その中には、さまざまな発想、さまざまな考え方が充滿しているのでございます。私はその中でもつとも大切な問題は何であるかということ自分をなりに検討し考えてまいったのでございますが、それは「眼蔵」を学んでいくということは、それを現代人である我々の中にも生かしていかなければならないということである。その点から見ても、道元における究極の要点は何かといえ、道元禪師がもっとも確かな世界に生きておられたということであると思えます。そしてわれわれもまた、このもっとも確かな世界に生きなければならぬということでもあります。

仏教の歴史を調べてまいりますと、歴史的には大變有名な仏教者、あるいは仏教学者が印度、中国、日本において現われているのですが、はたして、その人が確かな、確実な世界に生きていたかどうかということになりますと、はなはだ漠然としていることが多いのでございます。私はしばらく禪師の書物を学んでいるうちに、道元禪師こそ、確実な、ゆるぎのない確かな世界に生き通された稀れな人物であることに気づきました。その後、ずうっと道元禪師に教えられてまいっているのでございます。そして、実は現代こそ、このような世界から、もっともかけ離れ、一番縁のない状況にあるのではないかと思えます。したがって、われわれもまた禪師と同じもっとも確実な世界をとりもどさなければならぬと思うのでございます。

これを、「正法眼蔵」の「辨道話」のところ申しますと、「辨道話」の一番最初のところで「ほとけほとけにさずけてよこしまなることなきは、すなわち自愛用三昧、その標準なり。」とあります。仏が仏にさずけ、仏祖から仏祖へと伝わってきた、この仏の自受用三昧、これが道元にも伝わってきて、道元はこの仏の自受用三昧の中に自ら安んじて生きつづけ、生き通しておられるのでございます。これは仏教思想史からみますと、私には大變興味深い重大な問題でございませうが、道元禪師こそ仏祖のいわば、永遠の仏の中に生きつづけていると思うのであります。このことが「眼蔵」の根幹になつていと思えます。

禪と現代(玉城)

これは「眼蔵」のいろんな巻にあらわれていると思うのですが、一つの例をあげますと、「一顆明珠」というのがあります。この中で玄沙という人物があらわれてまいりまして、この玄沙という人は漁師をやって生活を営んでいたのですが三十才の時に無常を感じまして、舟をふりすてて、雪峰山真覚大師に参じたのです。その玄沙が方々の禅師をたずねようとして、ある日旅にでたのであります。ところが山の中で石に足をぶっつけて、血を流し、その痛みにたえかねている時に玄沙は初めて目覚めることができましたのであります。そこで、方々の禅師をたずねることをやめ、ただちに雪峰山真覚大師のところにもどってまいりまして、「終に人を誑かさず」という言葉を真覚大師に呈したのであります。真覚大師はその玄沙の言葉をことのほか喜んだのでございますが、私はこの玄沙が「終に人を誑かさず」(もう金輪際、だまされません、)こういう世界に目覚めたと思うのでございます。玄沙はその時、もっとも確実な、けっしてゆるぐことのない世界に生きることができたのでございます。

道元禅師は、この玄沙のこの話を「一顆明珠」の中に續々として説いておりますが、その玄沙が「尽十方世界、是一顆明珠」とっております。我々の全世界は一つの明かな珠であるというのであります。道元禅師も、この「尽十方世界、是一顆明珠」という、この中に五十四年の生涯を生き通してこられたものと思われまします。我々は単に「正法眼蔵」の説法をまねるというのではなしに、道元の生き通した、この確かな世界に、我々もまた自ら生き通していくということが、今日の現代社会において、また、現代人である私どもにとって、もっとも大事なことであると思っております。

実は、こうした生き方こそ、現代の世相からは掛け離れた縁のないものになってきておりますが、そうであればこそ、混迷した未来に向っている現代において、もっと大所、高所から、いかえれば永遠の世界から、それは実はこのもっとも確実な世界なのですが、そこから現代を、そして自分自身を注目していかなければならないと思っております。

今日、愛知学院大学の禅研究所の講演会に招かれまして、「禪と現代」という大きな題目をかかげましたが現代というものの特徴を考えてみますと、道元禅師の開発された確かな世界というものを、あらためて我々はみなおしていく必要をおぼゆるのでございます。長い間、御清聴ありがとうございました。